

平成 29 年から日本学術振興会の研究費を得て、「予測的符号化の原理による心性の創発と共有 - 認知科学・人文科学・情報学の統合的研究 -」というプロジェクトを行ってきました。昨年度から始まった第二期のテーマとして、戦争、大災害、パンデミックのような危機における人間の心性の変容を探求しています。

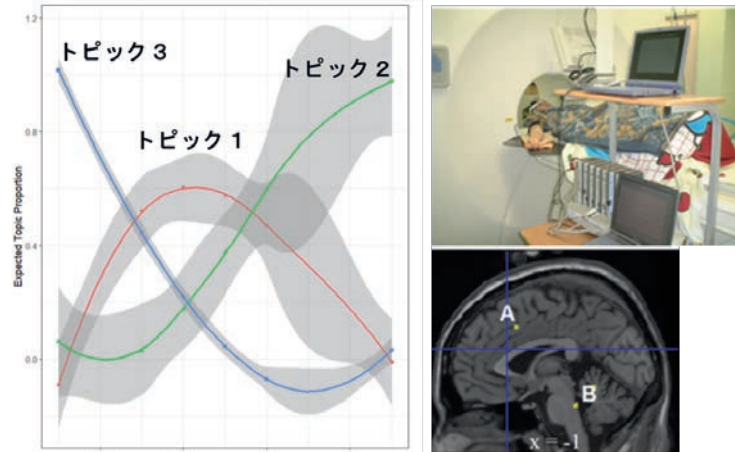
このプロジェクトでは人文学の研究者が、言語を統計学的に解析するテキスト・アナリティクスを用いて目覚ましい成果を挙げています。本学の中村靖子先生（ドイツ文学）は、独裁者ヒトラーの演説を、語の出現確率から背後の主題とその時間的変化を推定する構造的トピックモデルにより分析しました。戦前には経済、生産、革命、などの社会変革を志向する主題が中心ですが、第二次世界大戦の開戦と共に主敵であったイギリスへの言及や、目的、力、などの主題が増加します。そして戦争末期になると、戦闘、義務、終末、などの勇ましいが空虚な主題ばかりになっていく様子が可視化できました（図 A）。

心理学では、自然や宇宙などの巨大な存在に触れると畏怖（awe）の感情が生じ、自分をちっぽけな存在であると思う一方、利他的で協力的な態度になることが報告されています。東京外国語大学の伊東剛史先生（歴史学）は、16-19 世紀の文学作品における語の共起確率分析により、awe という語がそのような文脈で使われるのは 19 世紀後半からであることを発見しました。心理学が示した畏怖という心性は、実はごく最近成立したもののなかもしれません。

このプロジェクトでは、こうした人文学の学知を、私が専門とする脳機能研究と融合させて（図 B）、新たな人間観を拓くことを目指しています。

大平英樹 教授

A ヒトラー演説の構造的トピックモデルによる分析 B 脳機能研究の例



中国哲学研究室の「中国哲学」という名称、どんなイメージがあるのでしょうか。「『中国哲学』ってそもそも何？そりゃ、『中国』の『哲学』なんだろうけど……？」という方が多いかも知れません。

始皇帝による中国統一以前、諸子百家と呼ばれる多くの思想家たちが、それぞれの思想を掲げ、論争を繰り広げました。この時代に誕生した、儒家・道家・陰陽家・法家・墨家・兵家などの思想は、後の中国思想の基礎となっています。漢代以後の思想界では、国家教学となった儒教が思想界の中心となりますが、他の思想も負けてはおらず、各自発展・深化しています。また、儒教・道教・仏教といった思想間の角逐なども目を離せないところです。

話を戻して、「中国哲学」とは、漢文（中国古典）のうち、これら思想的な文献を研究する学問ということになります。

なので中哲研では、「子曰く、なんちゃらかんちゃら」とか、「人の性は悪にして、其の善なる者は偽なり」とか、「上善は水のごとし」とか、そういう感じの漢文を毎日読んでいるわけです。授業の中心は「演習」です。担当の学生が指定された漢文を読んできてその内容に関して発表し、それを元に、教員学生みんなでなんやかやと話しあいます。各自の漢文読解能力や資料調査能力、または議論能力の見せどころでもあります。もちろん「講義」もあります。

卒論・修論などは、自分が興味を持ったテーマを自由に選んで研究することになります。もし貴方だったら、「子曰く」の儒家思想？「無為自然」の道家思想？「兼愛交利」の墨家思想？「風林火山」の兵家思想？それとも「木火土金水」の陰陽五行思想？どんな思想がお好みでしょうか。

「へー、ちょっと面白そうかも」と思ったその貴方、そう貴方です。奥深い中国哲学の世界、私たちと一緒にちょっと覗いてみませんか。

佐野大介 准教授



考古学という言葉を目にした時、皆さんはどのようなイメージを持たれるのでしょうか？やはりピラミッドや縄文土器など、どこかミステリアスなイメージを持つ方が多いのではないかと思います。少し詳しい人であれば、最新技術で過去を解明していく科学的な学問と思われているかもしれません。この両極端な印象は、大昔の痕跡から歴史を描き出す学問である以上、半ば必然的に生じるものと言えるでしょう。考古学という学問の特性は、物理的な痕跡から過去を復元するところにあります。テレビに考古学者が登場すると、細心の注意を払って遺跡の発掘を進めている様子が映されますが、これは微細な痕跡から少しでも正確な歴史像を導き出そうと努力しているからにほかなりません。

土器や石器などの遺物を扱う時も同様で、詳細な観察を行いながら図面を描きます。その結果明らかになった地域や時代によって生じる形状の差をもとに、地域間交流や社会動向を読み解く研究が成果を上げてきました。ところが、研究が進むにつれて観察内容が細かくなり、手描きの図面では考古学者間の議論が難しくなってきました。そこで、図面ではなく 3D データを用いることで、この問題を克服しようとする動きが盛んになってきています。名古屋大学考古学研究室も、3D データ化した遺物をビッグデータとして編成し、AI によって分析を行う研究を進めています。これが実現すれば、大量のデータに基づく統計情報から、遺物の年代や地域を客観的な指標を示して判定するシステムの構築が可能になります。人間の観察と AI による観察の比較など、これまでの考古学では考えられなかったような問題意識も生まれており、研究は日々発見の連続です。

井上隼多 博士後期課程 3 年

ディープラーニングによる観察点の比較

